

## 手塚治虫作品集その11―『どろろ』四巻―

初出雑誌 「週刊少年サンデー」 一九六七年八月二七日号〜一九六八年一月一日号

初出雑誌 「週刊少年サンデー」 一九六八年一月七日号〜一九六八年六月三日号

初出雑誌 「週刊少年サンデー」 一九六八年六月一日号〜一九六八年七月二一日号

「冒険王」 一九六九年七月号〜一九六九年一〇月号

秋田書店が刊行した秋田文庫には、荒俣宏氏が解説文を寄せている。ここに登場する奇怪な生き物たちについて藤澤衛彦『日本妖怪年表』を引用する。『日本書紀』から明治維新までの怪奇現象データベースと云う。この主人公百鬼丸は、生まれながらにして四十八の魔物から五体部位を奪い取られこの世に誕生した。

ここに登場する魔物は、多種多様である。金小僧の巻に登場する「万代さま」ともののけ「金小僧」との因果関係はすつきりしない。この

① 「万代さま」とは、実は人面瘡じんめんそう↓鬼女きじよ↓女夜叉にょやしやとガマクジラ↓怪物という躰相を見せているのであった。これが、百鬼丸の右の手を取り返す魔物であった。

② 「妖刀ようとう」とは、名刀か…よつぼどの死霊にとりつかれた刀。だが、護符がその力を殺ぐ。これが百鬼丸の左眼であった。

③ 「妖狐」 ↓どギツネ↓九尾の狐。百鬼丸の鼻が戻る。

ここで、実の弟である多寶丸（父醍醐景光、母にも）に出会い、彼と決闘する。そして、多寶丸を斬ることになる。このことで自らの命をも断とうとするとき、盲目の琵琶法師が再び彼の前に現れる。

④ 「白面不動」 マムシの大群を操る。 ↓カビに精気が潜り込む。百鬼丸の耳が戻る。

琵琶法師の語り「なあ、百鬼丸よ。人間のしあわせちゆうのは、「いきがい」ってこった……」

「鯖目の巻」 三本杉の鯖目の屋敷

⑤ 「いも虫の化け物」「蛾の化け物」 ↓「マイマイオンバ」 ……鯖目奥方  
百鬼丸の右足が戻る。

二疋のさめの巻

⑥ 「サメ」の妖怪。三白眼。発酵物のガスを吐き出す。百鬼丸の声が出る。

「ミドロの巻」

⑦ 「妖馬」と賽の目三郎太

⑧ 「大龜」

百鬼丸の左の眼が戻る。

⑨ 「四化入道」 もぐら。野ねずみ、かわうそ。かえる。

⑩ 「大川村ばば」

⑪ 虎・猿・蛇・他混在型の化け物。



この百鬼丸が育成して人の世に生きるうえで、欠かせないのが人体たる手足耳眼などであった。凡て一人の育ての親である医師の手によって、義脚・義手・義耳・義眼が木と焼き物によって作られて彼の人間としての不足部分を見取っていく。

百鬼丸には、心の言語、今で云うところの「テレパシ」による人との会話交流を行うことができるのだ。

この百鬼丸が成長するにつれ、不可思議な出来事が幾つも起こるようになっていく。妖怪の仕業だという。

「妖怪II化け物」とは一体どういう世界のどういう生き物たちなのだろうか？ 彼の天性の能力を知って集まってくるのだ。

或時、彼に告げる聲がする。四十八の魔物との出会い、それは、彼の不足する身体部位四十八に関わるという。その足りない部位を魔物から返して貰わねばならないという宿命があったのだと知る。

### 法師の巻



盲目の琵琶法師が独り言のように謡い聞かす。

琵琶に仕込まれた刀が引き出される。仕込み杖という業物が存在する。その一つだ。

剣の極意を知る瞬間でもあった。そして、心の通うことのできる人に出会うきっかけでもあった。

琵琶法師が案内したとある羅生門のような建造物に住まう子どもたちと暮らす「みお」という女人出会えたのだ。

そのみおの境遇を知る術もないままに、武士の集団に殺傷され、焼き払われてしまう。

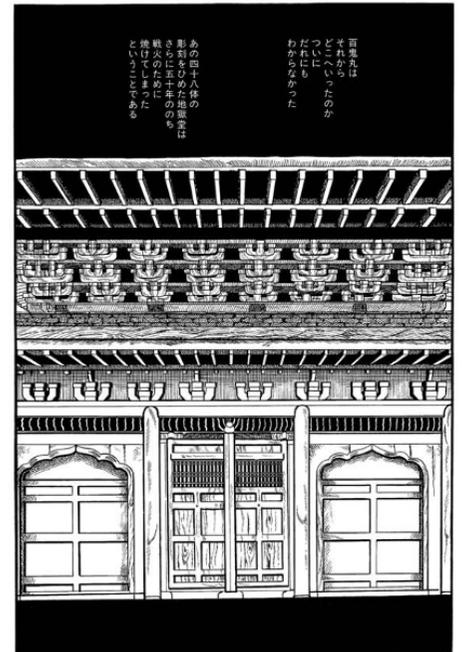
彼は、このときはじめて人を憎み、その武士団をことごとく殺害することになった。

この己の育成されてきたことからの一五一十を怪盗「どろろ」という機縁をもった子僧に話して聞かせていく形態で読者である私たちに伝えていく手法がここにはとられている。

金子僧の巻 已下続行



最後に登場する妖怪



百鬼は  
 安んずるは  
 どこへいたのか  
 ついでにも  
 われなかつた

あの堂十八体の  
 影をひいた地獄堂は  
 さらに五十年のち  
 戦火のためには  
 焼けてしまった  
 といふことである

どろろ

昭和42年 8月27日号～昭和43年 7月22日号  
 少年サンデー 冒険王  
 昭和44年 5月号～10月号 連載

【どろろ ④】 完